

1. 教育の責任

学部教育では母性看護学、大学院教育では助産学を担っています。母性看護学では、女性の生涯を通じた健康とそのケアについて学びます。さらに、助産学ではより専門的な知識をもって分娩介助を含む周産期のケア、技術の修得を目指すとともに、妊娠・出産する女性だけでなく、思春期から更年期にある女性まで、さらには女性をとりまく家族、社会に対してもウイメンズヘルスの視点をもってそのアプローチを考え、学びます。

2. 教育の理念

家族の姿が変化・多様化する中で、生まれる子どもが健やかに成長できるように看護師、助産師に求められる役割はますます大きくなっています。新たな命と出会う出産の場がより安全で快適であることは、その後の母子の健康、家族の健康につながります。様々な背景をもつ対象の個性を尊重し、安全で安心なケアを提供できる看護師、助産師の教育を目指します。

3. 教育の方法

<教育の目的と目標>

修得した知識をもって状況を理解できることが、学ぶ楽しさ、自主的な学びにつながります。そのため、講義で知識を提供し、演習で知識の活用方法を教授します。学生の興味関心を引き出せるように、自らの臨床経験、教育経験も活かして理解を促します。学生は知識を教授されるだけでなく、学生自身が自己の課題を明確にし、自ら学びを深められることが大切だと考えるため、その意欲を引き出せる教育を目標にしています。

<教育実践>

学生自身が探求心をもって、自律的に知識や技術を学び続けられることを目指して講義、演習、実習指導を行っています。講義では、講義資料だけでなく教科書やガイドラインを活用しながら知識を提供し、基本を押さえます。テキストに準じることで、技術演習や実習で出会う事象について、学生自身でテキストにもどって確認するようになります。その確認を繰り返すなかで知識が定着していきます。課題の内容は、課題に取り組むことで、その後続く演習や実習がより効果的で充実したものになるように選定しています。また、臨地実習の場には、教材となる事例や場面が多くあります。それらを活かして机上の学びを深められるような実習指導を行うとともに、それぞれの学生が出会う事例を共有し、ディスカッションする機会をもちながら学生同士の学び合いも大切にしています。

4. 教育の成果

課題への取り組みでは、学生の主体的な姿勢が見られました。課題を提出することが目標にならず、実践にむけて使える知識、技術になるように自己学習を進めることができていました。学生は前向きに、積極的に取り組むことができています。

5. 改善への努力と今後の目標

講義で知識を修得し、実習で実践につなげられるように、また、実践を通して理解を深め、知識が定着することを目標に進めてきましたが、実習前の知識の修得、実践を通しての知識の定着に課題が残った部分もあります。この点に関しては学内演習の内容を工夫し、教授方法の検討を続け、PDCA（計画・実行・評価・改善）のサイクルを回しながら進めていきたいと思えます。また、助産実践科学分野の学生は、助産師国家試験に臨むため、全員の合格を目指してサポートしていきます。

【添付資料】